
トーマス・マンとアグニス・E・マイアー (2)

洲 崎 惠 三

日本語要約：

アグニス・エリーザベト・マイアー (Washington Post 社主 Eugene Meyer 夫人, Agnes E. Meyer=以下 AEM) は、なぜ、どのように、トーマス・マン (Thomas Mann=以下 TM) への関心をもったのか？ そしてその関係は男女問題を含めどのように展開し、どのような意味をもったのか？ 450通以上の往復書簡、TM の日記、AEM の回顧録などをもとに、前回に続き両者の内面の軌跡を追う。「私の愛はソロのダンス」と AEM は TM や Goethe に冷気を感じる。一方の目からは Faust が、他方の目からは Mephistopheles がのぞく。何事も包容する偉大さとイロニーのニヒリズムが漂う。しかしその二元性こそ芸術家の創造力の源泉である。TM は AEM を Thamar や Frau von Tolna 像に形象化するとともに、最晩年まで自己の生活と創作プロセスを AEM に報告し続けた。手紙と日記の落差にもかかわらず、AEM は TM の生活と創作の守護女神でありつづけた。

キーワード：Joseph と Potiphar 夫人、冷気、ニヒリズムのイロニー、Thamar と Frau von Tolna

1. Wyoming 山中にて

1942年5月29日 TM 77歳の誕生日を前にした AEM の手紙。「ヨゼフ書評を書いたのは1938年2月。ほんとうに、たったの4年？ そんなことってあるのでしょうか？ あなたを知らなかったときなどそもそもあったのでしょうか？ 私は思い返すと、あなたと知り合う危険を冒す自分の意図をはっきり覚えています。というのもそれは私にとってひとつの冒険だと思われたからです。1937年夏私は山の孤独のなかでひとり、自分をまともに見据え、かすかな憂鬱気分を克服しようとしていました。まったく偶然ですが他の書物といっしょに『エジプトのヨゼフ』を持ってきていました。1週間にわたる精読のあと、他の本には触れませんでした。毎日私は短ズボンで原始のしじまの山に登り、いくつかの頂きに座って、苦しくもあり救いでもある考えに身を沈めました。感謝の気持ちをもって私の考えは、いま他国に住まざるをえない未知のこの作家を受け入れました。私は散歩中ゆるんだ石を足で谷底に押し落として自分に言い聞かせました。〈まったく同じようにこの作家の障害となる石を取り除くことができる〉と。」

TM の作品世界と遭遇し、TM 本人にアプローチしようという決意をもつにいたるその経緯については、これとほとんど同じ表現が AEM の自伝 *Out of the Roots* 『ルーツ探索』第IX章 Washington (184ff.)、さらには自伝 *Life as Chance and Destiny* 『チャンスと宿命としての人生』の第10章 *A Turn in the Wheel of Fortune* 『運命の車輪の転回』にもある。

前者 (*Out of the Roots*) は TM 存命中の1953年に書かれて TM も読んだが、後者 (*Life as Chance and Destiny*) は TM 死後15年後の1970年に上梓された。前者は Paul Claudel (1868.8.6-1955.2.23) と並んでの回顧で、フランスとドイツ、カトリックとプロテスタントの比較と、両者の共通する二元性とその総合に AEM の希求する精神の深みと高さを洞察していて、おもしろい。後者の叙述には、回顧の美化があるとしても、AEM のより客観的でかつより深い心情の吐露がある。本稿まとめの部分でより詳細に触れたい。

実際に TM の障害となる石をいかに取り除いたかは、Princeton 大学特別教授職、国会図書館 Consultant ないし Fellow 職の斡旋などによる合衆国における経済的社会的地盤の確保、*Washington Post* (以下 WP) や *New York Times* (以下 NYT) 紙上での書評や翻訳によるアメリカ国民への紹介など、前回詳述した。

AEM の TM との邂逅は、Claudel の場合 (1927~33 駐米仏大使, 21~27 駐日仏大使) 直接本人に接してから (personal) だったのに比べ impersonal, すなわち読書によるものだった。『ブデンプローク家の人々』(1900) への感激はこれを愛読した北独出身の両親から受け継いだ。しかし初期短篇小説にはなじめなかった。なぜならそこに充満する、死への親近感、鋭い皮肉、破滅感覚に、不安な青春がかき乱されたからだ、という。(Roots, 183)

直接の出会いは、WP 紙の Interview のさい、1937年4月である¹。

同年8月 Wyoming は Yellow Stone 公園南西部にある Eugene Meyer 所有の大牧場 (Ranch) に家族で休養に行ったとき、AEM は自己の幸福状態にいついかなるときも欠かすことのできない完全なる孤独への欲求が高まり、ひとり9,000フィート(約2,743m)の山中の牧歌的スポット、鱒の泳ぐ小川が蛇行し、色とりどりの花咲く草地にテントを張り、リスや鳥や昆虫に囲まれながら、巨木の葉蔭に寝そべて、『エジプトのヨゼフ』(1936, *Joseph in Egypt*) を読んだ。そして何よりもその文体に情熱的に惚れこんだ。

「わたしは TM の文体の途方もない美しさに魅惑された。それは芸術としての言葉の秘奥への参入、徐々にではあるがそれだけ多様な Initiation であった。中国絵画を初めて見たときのように、完全にその純粹さのとりこになった。」(Wheel, 804) 「TM の文体の音楽性は、Fritz Reuter, Theodor Storm, Theodor Fontane など北独の作家に通ずる。そのうっとりさせる、楽しいがメランコリーあるリズムは、子供時代に朗読してもらったそれらの作品に耳を傾けていた私には、まことになつかしいものだった。TM の文体には、心理的濃密さと、形式の力強さがある...TM の散文の魅力は何よりも、あの北独の伝統の文化的センスにおいて音楽的であり、本質的にプロテスタントであるものすべてに対するノスタルジア、要するにきわめて幸福だった子供時代を通じて私の美的センスを養ったひとつのドイツに対する郷愁である。」(Roots, 185)

2. 『エジプトのヨゼフ』(*Joseph in Egypt*) 書評

下山して *NYT Book Review* (以下 *NYTBR*) 編集長 Donald Adams などとランチをとっていたとき、*Joseph in Egypt* の批評をできる人が見つからないと言っているのが聞こえた。文学の書評は一度も

したことはなかったが「私ならできるわ」と AEM が言うと、Adams 氏は懐疑的微笑を浮かべながら「よろしい、ではやってみてください」と応じたという。1938年2月27日付 *NYTBR* トップページから写真付きで3面に及ぶ書評であり、*WP* 紙では社説と並んで掲載された。アメリカでは十分知られているとはいええない TM の人と作品、危機に瀕する西欧デモクラシーにおけるその重要な意義を、知ってもらいたいという願いが AEM の基本だったという。(Wheel, 805) しかしたんに同国人に対する TM の紹介と啓蒙にとどまらず、女性としての潜在意識に根差す共感の読後感ともなっている。

「TM の最新作『エジプトのヨセフ』—その芸術は普遍的質を達成—」と題された書評は、まず Homer や Shakespeare のような普遍の言葉による神話題材の蘇生があると指摘。TM の物語には濃密なリアリズムによる象徴性がある。兄弟による疎外と、Potiphar 夫人 (Mut-em-enet) の讒訴による Joseph の埋没と蘇生、下降と上昇には、芸術家の自我と社会、個と全体、精神と実生活との葛藤と調和の問題が反映されている。シンフォニーのような物語のメロディーに、魂と精神のほほえみが聞こえる。肉体を求め墮落する魂 (Soul, Seele) を、その故郷である樂園に導き戻していくことが精神 (Spirit, Geist) の仕事である、というのがこの物語の詩的原理であると指摘する。

Joseph in Egypt のクライマックスは、Mut-em-enet の誘惑と Joseph の純潔の場である。「TM はこの有名な場面を再説するのに、それが必然にそうならざるをえないように、その名匠ぶりを発揮している。彼女は必ずしも、聖書が示しているような、みだらな存在ではなかった。Pharao の信任厚い宦官廷臣 Potiphar は、Amun 神殿の尼僧たる妻の精神的使命と Joseph に劣らぬ貞潔を自慢するほどだった。TM がちょうど彼自身の人間的芸術的調和に達したときにはじめて、この不可抗かつ純粹に肉体的な情熱の描写におのが才能を捧げるべきだったということはまったくの偶然であろうか？ いずれにせよこの愛称 Eni の女らしい徐々に崩壊していくプロセスは、抑えきれない肉体の危急事態に魂が徐々に屈服していくきわめて精確な描写であろう... この驚くべき症例物語を、自分自身その徐々に進行するもだえる苦悶 (Agony) と一体化しないで、また望みのない防御メカニズムやこのエジプトの聖女の恋の欲求に最終的には抑えきれず引きずりこまれないで、読むことのできる女性がいるだろうか？」

自分自身のなかを流れる熱い血と涙で、やがて Potiphar 夫人の場をみずから演ずることになろうとは、AEM も予感しなかったのだろうか。全体としては、書評の筆致はきわめて客観的である。

TM の文体のすぐれた特性は何であるか？ ユーモアである。TM の作品は、自己の二元性、すなわち芸術家と社会、心と肉体などの間にある内的葛藤から生じ、両者に対する鋭いアイロニーがその創造力の動力になってきたが、*Joseph* 物語では、それは生命を魅惑するユーモアの遊戯へと円熟している。創造力の根源である二元的原理の協調からユーモアが生ずるのだ。このユーモアは、さざ波を立てて動く海面に当たる陽光のようにどのページにもきらめき、登場人物たちに親愛を抱かせる源として働いている。

時代と青春のデカダンスと死へのペシミスティックな共感から、芸術家と社会、精神と現実の間にある葛藤を乗り越え、相反する二元的原理の調停に、ポジティブで晴朗な人間性の理想を求め、それを芸術形式の厳粛さと美に表現しようとしたのが、TM の初期から『魔の山』を経て『エジプト

のヨゼフ』に至るプロセスだったと AEM は的確に跡づけている。

AEM は、専門的研究の進んだ今日からみれば、この書評は単純だろうと回顧しているが、TM の作品のアメリカへの紹介と啓蒙という域を超えて、全体として Joseph 小説の核心を突く書評となっていると筆者は思う。とくに、Joseph と Potiphar 夫人の場を、これを自分のなかで共感しないで読むことのできる女性はいない、その叙述には TM の文体の最も美しいリズムがある、と言っている点や、Ironie の鋭さより Humor のほほえみをどのページにも読み取る、あるいは Joseph 小説に TM の創作活動の一つのクライマックス、すなわち個と社会、精神と現実、芸術と実人生の葛藤とその克服調和を看取している点などである。TM がのちに AEM を批判する、ユーモアや距離をもって私を見てくださいという訴えは、的を射ているのだろうか。

3. Josep 物語と Goethe 小説

1924年9月『魔の山』擱筆、11月発刊後、ヨゼフ物語序曲「地獄下り」(*Höllenfahrt*) 執筆開始は26年1月である。TM 50歳。以降この四部作が完結まで16年間(1926年1月~1943年1月、50歳~67歳)を要したことは有名である。

München で1930年12月擱筆の第1作『ヤコブ物語』は33年10月 Berlin の Fischer 書店から発刊、32年6月擱筆の第2作『若きヨゼフ』は34年4月発刊された。TM 57歳。

1932年 Goethe 没後100年祭『市民時代の代表者としてのゲーテ』講演。33年1月30日 Hitler 宰相就任。33年2月10日『Richard Wagner の苦悩と偉大』München 講演。翌日亡命を自覚せずオランダへ出立。Joseph 物語第3作『エジプトのヨゼフ』原稿は長女 Erika が救出。爾来3年6か月、南仏やスイスの亡命地を同伴する。スイス Küsnacht で36年8月23日擱筆、10月 Wien に亡命した同書店から出版。TM 61歳。AEM の書評は38年2月27日付 *NYTBR* と *WP* に掲載された。

36年10月第4作着手の前にゲーテ小説(1936.11.11~39.10.25)の構想執筆挿入。その第6章 August を、38年9月14日アメリカ移住出立の前日、Zürich の Schauspielhaus でヨーロッパ別離の朗読。39年10月 Princeton で擱筆、12月 Stockholm で発刊。TM 64歳。AEM はその Low-Porter 英訳版(Alfred Knopf, 1940)を待つて40年8月23日付 *NYTBR* に「われわれの時代へのメッセージ『恋人再来』(*The Beloved Returns*)」を書いた。

最終巻『養う人ヨゼフ』は1943年1月4日 Pacific Palisades, 1550 San Remo Drive の自宅で擱筆、43年12月 Stockholm で発刊。TM 68歳。AEM は44年6月25日付 *NYTBR* に2面にわたる書評 *Mann's Final Joseph Novel* を載せた。

ヨゼフ小説執筆の動機は、聖書物語3枚折聖画像の序文執筆依頼、25年3月船会社招待による約4週間にわたるエジプト旅行見聞(さらに30年2月から4月まで2回目のエジプト視察旅行)、「旧約聖書ヨゼフ物語は簡潔すぎる。もっと詳述が必要」というゲーテ『詩と真実』の言、執筆中進行しつつあった時代の反精神的な神話への先祖帰りに対する危惧などがあげられる。さらには R. Wagner の *Nibelungen* 四部作に対する言語による対抗作という芸術的野心もあったようだ。Siegfried から Joseph への道は、Wagner から Goethe への道でもあった。『指輪』のような神話の儀式化よりも、

Faust 第Ⅱ部のような神話との遊戯。Freud 深層心理学 (『フロイトと未来』1935) や Karl Kerényi 神話学などによる心理学と神話の結びつき。Flaubert の *Salambô* のような古代の錦織ではなく、Ironie による神話の受肉化。Humor による神話の人間化 (Käte Hamburger)。AEM の言うように、ユーモアの微笑みがどのページにももれている。

4. Katharine Graham (キャサリン・グラハム) の *Personal History* (『わが人生』)

AEMのTMとの出会いは、AEMの3女Katharine Grahamの自伝*Personal History*によると、少女のような惚れこみで、家族を含む周囲を忘れるほどの一種の憑依状態とさえいえる状況だったようだ。母と違ったより冷静な目でTMに対する母の姿勢を叙した、のちにWatergate事件発生時のWP社主になるこの娘の回顧は、まことにおもしろい。

男性たちとの熱烈な交遊関係は母を支え豊かにしたが、同時に心の平静を脅かし消耗させた。その一人がTMで、本人に会う前からその作品に魅せられていた。1937年4月The New SchoolでのTMのWagner講演を聞くためにNYに行ったとき初めて本人を見た。完全に打ちのめされ、「片思いの情熱とはいえ夢中にさせる人」と呼び、作家としても人間としても称賛した。2回目にFreud講演を聞いて、この困窮の時代にこのような偉大な精神の人物がいることを発見したことに喜び、ただちにWP紙のInterviewを決意する。あまりの感激に顔もあげられないほどだったが、大学生だった娘に「女性記者になりなさい、Kay、思いがけない情熱の対象を瞬時に見つけ出してくれるという理由からだけであるとしても。」と諭す。(PH, 88f.)

TMへの想いが大きくなるにつれて、情緒面の不安定さも増す。37年夏Wyomingの牧場では、depression(憂鬱状態)が母の高い興奮状態を悪化させ、そのとき以来深酒が目立ち始めた。母を乗せたまま馬が暴走し、止められたが、何かがつつりと切れたようで、感情の爆発があった。父と言い争い、自制心を失い、ひとり閉じこもって痛飲し始める。父はなすすべがなかった。付近の山に登る母のあとを追い、泣いている母とふたりで話した。母の話はTMのことばかり。母の思考や感情にTMが深く入りこんでいる様子。TMはいかに重要で勇敢で明敏であるか。どうしたら亡命せざるをえないTMを助けることができるか。(PH, 89f.)母は自分の出会ったうちで当代随一の人物としてTMを崇拜し、自分はTMのお気に入りの数少ない、いなほとんどいない女性のひとりであるという思いをもっていたが、実際の情熱は母の側だけにあるように見えた。(PH, 100)娘の目は鋭い。

のちに、父Eugene Meyerの後継者となった夫Philip Grahamが女性問題と精神疾患でピストル自殺した後、ワシントン・ポスト紙社主となり、Watergate事件でNixon政権と死闘を演じ、それに勝利してWP紙をアメリカの二大新聞に押し上げ、*Personal History*で1998年度伝記部門Pulitzer賞を受賞したKatharine Grahamの、母AEMに対する娘の目はきわめて冷静である。TMに対するAEMのこのような熱い情熱と崇拜が、次のような経緯の背景にあったのだろうか。

5. Santa Monica の Potiphar 夫人と Joseph

(1) 1942年3月2日 TM の日記。「疲れきって Hot Springs へ赴いた Meyer 夫人から手紙。私についての絶望的な仕事のために、社会活動から離れて、私という人物に気が詰まるほど傾注している。ぞっとする。ここにきてなお一人の女性が私の人生へ踏みこもうとしている、それも大まじめに。」

私に関する仕事とは、AEM が *The Godseeker* (『神の探究者』) という著作を執筆中で Tolstoi, Dostojewski と並び TM を比較研究しようとしていたことを指す。

42年3月8日 TM の手紙。「私の魂の救済の心配をして下さるのは、ほかならぬそう心配して下さる方の魂にとって不要な負担になるとしか思えない。愛する友にして支援者であるアグニス、教育的な高潔な心が信じておられるよりも、私ははるかに変えることができず、ゆるがず、曲げることができず、ひどく頑固で、影響を受けにくい。そのような教育の高潔さは目的を果たすことはできないということを知っているから、それは私を不安がらせる。私を理解し、解説したりすることはできるが、私を変えることはできない。パラス・アテネでも私を、今あるがままの私として受けとめざるをえないだろう。自分がきわめて不十分であることは自覚しているが、今ある私が明確に私であり、教育の対象に役立たないというのは年のせいだけというわけではない。私が心配しているのはむしろあなたのことだ。私に関する本を書くことであなたが心身過労になられるのではないかと良心の呵責にとらわれている。私の作品も、私に関する本もどうか重く考えすぎないでください。『ヨゼフ』は何ととっても第一に、雄大さのまじる、ユーモラスな叙事詩、神話の人間化、神話との遊び、ないし遊びそのものなのです。ですから、あまりに真面目に取りすぎないようにしてください。笑っていただきたい。善良な作品はだれをも苦しめようとは望まない。まして善良なその女性解釈者を苦しめようなどとはさらさら考えることなどないのです。」(TM→AEM, 42.3.8)

この手紙は TM の AEM に対する姿勢の基本であり、往復書簡のライトモチーフでもある。しかし以下の1週間ほどは実に異様な日記が続く。

(2) 1942年3月29日、AEM が Los Angeles の Hotel Miramar & Bungalows に泊まる。家を見せる。3月30日正午「夫人と、彼女の仕事、現在の状態、〈われわれ〉のことについて話す、*Thamar* の一部を朗読。」3月31日「書斎で二人。具合の悪い (pénibel) 対話。」4月1日「Eugene と挨拶。」4月2日「*Thamar* の3分の2を朗読。興奮。ランチを共にする。こういうことも終わりに近づいている。」4月3日「ミラマーで、驚くこと、柵を守るべきことがいくつかあった。」4月4日「Meyer 夫人とランチ。*Thamar* を最後まで朗読。合間をぬって Eugene。きわどい言動には、わからないような顔で応対。私の心理解剖は夫人の本に任せる。私には人間へのかかわりが全くないということへの予感すらない。少なくとも *Tonio Kröger* 以降、エモーションに全く影響されないで書いている。すべて私がなぜ夫人と何の関係にも入らないのかの説明に役立つというものだ。しかし *Thamar* は、少なくとも彼女が〈邪魔にはならなかった〉ということを示している。」

Thamar とは Jakob の崇拜者で、師の世界と神の教えに熱心に耳を傾け、ヤコブの第4子 Juda の2人の子供と結婚するが死別し、神殿娼婦となってユダその人の種を貰い、やがてその子孫がダヴ

イテを生みついに救世主に至る系譜につながる旧約聖書の女性である。「妻に死に別れた老人の心も自分にすっかり開かれている、それどころか少し自分に惚れたのではないかという思いをもてるほどであった。というのもタマルの性質は、自分自身苦の種になったが、厳しさとたゆまざる宗教的向上心と、Astarte (Ishtar) の魅力のある精神的肉体的秘密とが混じっていたからだ。」「Jakob が Thamar に惹きつけられ、彼女の敬愛に報いて、彼女を自分に惹きつけたとしても何の不思議があるろう？」(Joseph der Ernährer, V.1537f.) なお Thamar 執筆中 (41.12.2~42.1.16) に日米開戦があった。

イシュタルないしアスタルテとは、Gilgamesch に恋して拒絶され、父 Anu に頼み、火を吐く雄牛を喚ける古代 Babylonia の王女。Aphrodite や Isis と同系列の愛(豊饒)の女神である。AEM もまた、誘惑と聖性、罪過と救済、大地と天上、肉体と精神、Venus と Maria の両特性を内に激しく秘めた一人の女性であった、といえるのではないだろうか。「というのもどんな女も、墮落の手段であると同時に祝福の母胎であり、Astarteであると同時に神の母たる女 (Maria) であるからだ。」(V,1557)

(3) 42年4月9日「AEMから長文の手紙。微に入りすぎるし、部分的に驚くほど率直だ。無視の技術を発揮すること。」と日記に記されている。その率直な手紙とは帰路の Chicago で投函された42年4月7日付のもので、R. Vaget はこれを「愛の大きな手紙」(序説, 32)と呼ぶ。「私の心はあなたといっしょにいるといつも力あふれる発酵状態となり、さながらあなたの生命力が私の生命力を新たに高めしてくれるかのようです。私にとってあなたはいつも禁欲 (Entsagung 諦念) という人間的な自制心のままでおられる、しかもわりと長い訪問のさいにはゆるくなるというより厳しくなるだけだ、と言うべきでしょうか？ 私たちの間にある大陸がいま私には運命のすばらしい定めであると思われる地点まで来ました。だから私はつねに私に言い寄り私を甘やかしてきた世界へ奇妙な安堵の心をもって戻り沈潜しています。私が幸運にも裕福な暮らしをしていなければ、私が頭を載せている硬い岩を永遠に耐えることができないのではないかと自問しています。」芸術においてあなたと競うことはできないから、人間的にはどうあっても負けたくはないという思いに駆られる。勇氣ある人生と人間の真の美しさに挑戦されて、私は美德のなかで負けるのを拒否したい。驚くべき聞いたことのない思いだが、それはありだろうか？『ヨゼフ』で相互の神聖な崇拜のために創立されたヤコブと神の盟約と類似の関係が二人の人間の間にもあるのではないだろうか？一方が他方よりはるかに優位にあるとき、純粋に人間的な出会いのなかで同じことがどうしてできないのだろうか？もし女性が自分を完全に発展させようと思うなら、女性が本能的に結びつける魂の絆が、男性を縛るネットではなく解放として役立つ、そういう作品を書くことができるだろう、そのために私はいつか時間を見つけて、女性一般に役立てなければならぬ。われわれがこれまでもってきた文明のなかで、女性は自分と子供たちが経済的に安全に守られているということを見ざるをえなかったゆえに、男性を縛るロープを必要としたと、女性を判断してはいけぬ。われわれはいまもっと別な世界、すなわち女性は男性と同じように自立した世界を迎えている。女性としてではなく人間としてみられる最初のチャンスが女性に与えられているような世界です。それこそデモクラシーの最も重要な側面の一つで、それ自体一つの新しい世界を生み出すかもしれません。それなしではお

そらく新しい世界は全く不可能です。」(AEM, 42.4.7)

新しい時代の新しい女性の心根を示し、神に対するヤコブの姿勢のような、TM に対する AEM の愛の形をあらわす基本となる大切な手紙である。結びで再度触れたい。

(4) しかしまず、この Miramar Hotel をめぐる日記記述や往復書簡から、Potiphar 夫人の誘惑と Joseph の逃亡の場を思い起こすべきなのであろうか？

K. Harpprecht は、AEM が TM を bed へ誘おうとしたなど考えられない、TM は矍鑠とはしているが67歳の誕生日を前にした老人、AEM は55歳の貫録あるおばさんだった、TM が無遠慮と感ずるような質問で悩ましたのだらう、あるいは優しい仕草を求めたのかもしれない、同性愛のことは感づいていただろうが、女として認めてもらいたかったのかもしれない、とコメントしている。(Hrp, 1278)

H. Kurzke は、なぜ TM は AEM から身を守らざるをえなかったのか、なぜなら AEM が TM の最内奥に手を突こもうと欲したからだ、AEM には TM の用心深さ (Zurückhaltung) がわからなかった、AEM は精神的にも肉体的にも TM のタイプではなかった、という。そして、アメリカ生活における快適さを気前よく提供してくれる、役に立つ AEM に対して、意識的に計算された一種の義務的演技をしていたのだ、と言う。(Kurzke, 428)

Marianne Krüll は、AEM が自著のためにもたとえば Lübeck の背景を入念に調べ上げ、TM が触れられたくない点にも触れたのではないだろうか？ TM がきわめて防御の姿勢をとったのは、TM が認めることのできないあるいは認めたくない真実を、AEM が言い当てたことを感じたからではないだろうか、と言う。(Krüll, 363)

TM が覗かれ触れられなくなかった秘部の一つは、同性愛であろう。同級生 Otto Grautoff 宛ての Napoli からのたよりに「知と性との悪魔に苦悩している」旨記されている²。AEM の指摘する「女性恐怖症」は、高根の花に恋心を打ち明けて嘲笑されながらみじめに死ぬ『小男 Friedeman 氏』(1897) はじめ初期短篇群の主導旋律である。生得の業の裏表かもしれない。Katja との結婚こそ生涯を通じて TM を堅牢な市民的生活の堅城で守った。長男 Klaus の43歳 (1906.11.18~49.5.21) での自殺に同性愛の影が全くなかったとはいえない。長女 Erika (1905.11.9~69.8.27) は Gustaf Gründgens と離婚後、父の最愛の有能な秘書であったが、妻に先立たれた Bruno Walter との関係もうまくいかなくなり、精神が全く安定していたとはいえない。姉弟とも Drag の助けも借りていたようだ。美しかった TM の妹 Julia (1877~1927.5.10) と Carla (1881.9.23~1910.7.30) も自殺した。TM の身边にはつねに、市民社会から失墜する危険な奈落が覗いており、死の影が濃かった。

「AEM は TM を愛し、相手も自分を愛する者として顔を向けてくれることを望んだからこそ、TM をより人間的に教育し改善し救済しようと欲したのだ。なぜ TM は、AEM の愛に応ずることができなかったのであれば、報いられない情熱で苦しむ AEM の苦悩への同情を少なくとももってやれなかったのか？ 情熱的に愛される苦痛は、情熱的に愛するが聞き入れられない苦痛よりも、小さくはない、というのであろうか？」と Marianne Krüll は、女性らしい優しい観察をしている (Krüll, 366)。賛成である。Venezia の迷路に、そもそも報われることのない愛の対象 Tazio 少年の跡を追

う初老の Aschenbach は、「愛される者より、愛する者のほうに、神が宿る。」(VIII, 492) と囁いたのではないだろうか。

6. ゲーテ、冷たさ、犠牲 (炎と蛾)

(1) 『ヴァイマルのロッテ』(『恋人再来』) 書評

これより2年前 AEM は1940年8月23日付 *NYT* や *WP* 紙に3面に及ぶ *The Beloved Returns* という *Lotte in Weimar* 書評を書いた。1816年9月『若きヴェルターの悩み』の Lotte 当人 Charlotte Kestner が44年ぶりに67歳の枢密顧問官 Goethe を Weimar に訪ねた事件が対象である。Goethe の内的モノローグもあるが、主として息子 August やその家庭教師 Riemer などとの Lotte の長広舌の会話から彫琢しようとした Goethe 像である。Goethe は1815年夏 Rhein 河畔 Gerbermühle で Marianne von Willemer との愛の相聞歌を『西東詩集』に刻印。1816年6月6日 Goethe 夫人 Christiane 52歳で逝去。

各章を追った主題の解説、初期からの作者の発展とその克服の到達点としての Goethe 小説、天才による天才の像の輝きなど、優等生的な紹介と書評ではある。しかし次の TM 宛ての手紙ほど一言で Goethe の、あるいは TM の Goethe 像の核心をついたものはない。

(2) 冷気

1942年5月5日 AEM はゲーテについて触れ、ゲーテの人間関係は一方通行で、だから彼の自伝にはぞっとする。その知恵にもかかわらず、『詩と真実』の冷気が私に吹きつけてくる。彼の人間関係はすべてただ、ゲーテがゲーテになるためにだけ存在する。Friederike エピソードも同じだ。天才というのは、たいした代償も払わずに、何でもすることが許されているのですね。非情さもユーモアの欠如も、疑いなく、この他を顧みない自己への集中努力への結果だったのですね。自己愛という貴族主義の一形式? と書いた。

「純粹に内面的で私的な関心事としてのドイツ文化というこの概念は、ドイツ国民にとっても TM にとっても一つの不運 (Verhängnis 宿命, 命取り) だったのではないのでしょうか。」

ドイツ文化の内面性、非社会性に対するのみならず、暗に TM への強い非難がある。AEM の Goethe 接近は TM が媒介だったからである。TM がこの手紙を家族に披露したことを知らせたところ、AEM は怒る。ゲーテについての部分が、優れていて、内的アクチュアリティもあると思ったので、そうしたのであって、これは唯一の例外であり、いつも内輪で朗読するという習慣がない、とむしろ相手を非難する。(TM, 42.5.23, 399)

同じ日の TM の日記には「あの愚かで暴君的な女性にいらだつ」(irritiert mich jenes dumme-tyranische Frauenzimmer)、翌日「あの女性像に対する憤懣、私にはふさわしくないが、神経質になる。」(TB, 42.5.24) とある。しかし周囲世界に冷たいと感じられる内面的ドイツ精神の非社会性問題は、自己批判も含め、*Doktor Faustus* や国会図書館講演『ドイツとドイツ人』(1945) など、TM 晩年の中心テーマのひとつとなった。

(3) ニヒリズムのイロニー

67歳の Werther に再会した60歳の Lotte は言う。

「それが Goethe であると知らなければ、いやたとえ知っていても、けっしてよい印象を与えないひとりの老人でした。愛想よくもてなそうと、ごちない物腰でできるだけのはしてくれましたが。」(II, 751, 息子 August への Charlotte Kestner の手紙, 1816. 10. 4)

AEM の感じた冷気である。長男 Klaus さえ感じた「氷のような冷たさ」である。(Prater, 705f.) この冷たさ (Kühle) はどこから来るのだろうか? ギリシャ語大辞典の編纂者, 1804年以降秘書でもあった Friedrich W. Riemer (1774-1845) の口を借りて語るゲーテの姿は, Albert Bielschowski や F. A. Theilhaber はじめ数多くの Goethe 論考に立脚した肖像ではあるが, TM の仮面の自己像でもあろう。

『ゲーテとトルストイ』(1928)『市民時代の代表者としてのゲーテ』(1932) 以来, 以下4つの引用句が, くりかえし TM のゲーテ像の骨組みを形成している。

- ①「ゲーテの否定の傾向と, どちらも信じない中立性がまたもや目に立って現れてきた。」(Kanzler von Müller, 1824.3.27 In: Herwig, Biedermann: *Goethes Gespräch* =GG III/I, 671)
- ②「ゲーテはそのなかに矛盾を含んでいるような文だけでしか話さなかったので, 聞き手は自分の思うように解釈できるようだった。この人は世界について Ich hab' mein Sach' auf nichts gestellt. (何事にも重きを置かず, 何事もわれ関せず) と考えているのは, 一種苦痛に感じられる。」(Charlotte von Schiller an Prinzessin Caroline, 1814.7.2, GG II, 915。Goethe: *Vanitas! Vanitatum! Vanitas!* 短詩「空の空なるかな!」の Refrain)
- ③「一方の目からは天使, 他方の目からは悪魔がのぞいている。そしてゲーテの話はあらゆる人間事に対する深いアイロニーである。」(Ernst von Pfuël an Caroline de la Motte Fouqué, 1810.8.22, GG II, 559)
- ④「ゲーテは寛容だが, 温和ではない」(1810.10.18, GG II. 566)

それは, 自然の子, ニヒリズム, Proteus (プロテウス) とかかわる。

Schiller の naiv と sentimentalisch, 素朴と情感, 自然と精神という対比でいえば, Goethe は前者の自然詩人である。太陽は善人も悪人も差別せず平等に照らすように, 自然はどちらにも味方せず, どちらにも無関心, つまり中立的である。何事も容認する寛容さと, 何にも重きをおかない無関心の中立性。それは何でもすべて包容するが, 同時に何事も偶然に従うニヒリズムの世界ともいえる。神も悪魔も, Faust も Mephisto も同居する世界。全とも無ともいえる。あらゆる自然に神が宿るといふ Spinoza 汎神論者 Goethe はしたがって神のような存在ともいえる。神は感激の対象であるが, 感激をもたない。神は人間の認識能力を超える。神は全である。悪魔も包含する。対立原理ではない。神は何でも包容するイロニー (eine umfassende Ironie) とさえいえる。神的存在には特有の香気が漂い, 周囲の人は快く感ずるはずだが, また胸苦しさと不安も覚える。ゲーテの寛容さ, 協調性, 忍耐強さは, 温和な感じではなく, 否定的無関心, 局外的中立性, 何物にも信をおかない, 何でも包容するイロニー, そのニヒリズムが冷気を発するからだ。あるいは周囲の人に冷たさと感じられる。自分だけに関心をおくエゴイズムの冷気ともいえる。

イロニーはあらゆるものに姿を変え、すべてと戯れうる水神 Proteus にも似る。どの姿も自分であって自分ではない、どんな意見も理解容認し、どの姿も包容するがどの姿にも信をおきえない、ニヒリズムの懐疑主義でもある。Brocken 山の天候のように予測確定できない気まぐれさを elbisch (妖魔性) と呼ぶなら、Goethe には elbisch な自然性がある。たびたびの不機嫌、意地悪さ、悪口、救いようのない沈黙があり、周囲を困惑させる。独特の冷淡さ、堅苦しさ、鎧をつけた儀式ばった態度、だんだんひどくなる孤独、頑固、暴君的狭量などへの傾向がみられる。また Goethe の発言の、意味の矛盾、是認と否定、あいまいな二義性も、何事にも信をおかない冷淡な中立性の一現象といえる。

Joseph のように Goethe は「天上からと下に横たわる淵の二重の祝福」を全能者から受けている。いいかえれば精神と自然の二重の祝福である。しかし呪いと不安も結びついている。自然と精神が融和している Goethe のような偉大な人間に、自然はおのれの神秘を開示する。片方の目からは天国と愛が覗き、他方の目からは氷のような冷たい否定と無関心の地獄が覗く。この矛盾を止揚する目こそ、芸術の目である。天と地獄、神と悪魔、全と無が震撼的に接近する芸術の目は、TM の Goethe 小説や Joseph 物語からやがて現代の Faust=Nietzsche 小説に極まる。

(4) Martin Walser (マルティーン・ヴァルザー) の批判

しかしこのニヒリズムのイロニーは、人間も理念も、さらにはおのれの棲み家たる芸術すら信じない。だから幸福もない。ニヒリズムはこの世で最もぶきみな客なのだ。その冷気を感じたのは AEM ばかりではない。

「いかにゲーテは意味のなさに抵抗したか。いかに美しく無意味に逆らったのか。すでにそのことが美しい。美しいものとはそもそも意味があるのだ。これこそゲーテというデパートで私が探し求めた信用のおける商品である。」「たとえば (*Iphigenie*) 高貴な勇気、卑劣さに対する抵抗、善意ある業績、良心からの情熱、どの物語も否定に終わらず考える最もよく美しい経過をたどるといったものが存在することを信じた最後の最も明るい人だったと思う。』³ という肯定的なゲーテ論を書いた Martin Walser は、「何でも包容するイロニーのニヒリズム、自然妖魔的な詩人の無定見、理念的感激のなさ」という TM の Goethe 講演を聞いた人も読んだ人もいなかったのだと、辛辣に批判した。

「人生の厳しい瞬間から残されたいくつかの引用から、ひとりの老人の英雄的努力、歴史や物語のために公共的理性の部署について頑張りぬき、自分を見てもらって理解しやすくあろうとし、ニヒリズムにゆだねることをしなかった老ゲーテの英雄的努力を、自分の典型的な相続人廃嫡を粉飾するために、その反対物に転化してよいものかどうかは、まことに問題であるからだ。」(『自己意識とイロニー』1981)⁴

もっともゲーテ生誕150年祭に Wien で初演された戯曲『ゲーテの手のなかで』(*In Goethes Hand*, 1982) では、ゲーテへの忠誠のために許嫁の Hannchen との結婚も伸ばした Johann Peter Eckermann (1792.9.21~1854.12.3) を、たとえば『心理療法』(*Seelenarbeit*, 1989) の社長と運転手のような M. Walser 作品の Leitmotiv である支配と従属関係における自己自身のアイデンティティ問題として、すなわち一種のゲーテの犠牲問題として扱っているのだが。

(5) 炎と蛾

ゲーテはゲーテであるためにのみ生きた、という AEM の鋭い非難は、ゲーテのエゴイズム、他人はゲーテという蠟燭の炎に飛びこむ蛾にすぎないという、天才をめぐる生け贄、犠牲の問題を突いている。Rolf Tiedeman は、*Doktor Faustus* 制作時にいわば Mephisto 役を演じた Th. W. Adorno を Schiller のドラマ *Fiesko* のなかで使い捨てにされたムーア人 Hussen に比している⁵。たしかに自己の作品と生活に有用な人物を TM は活用した。

Lotte が馬車のなかの仮構の Goethe に、あなたをめぐる人物には生け贄の匂いがすると言うと、Goethe は、蛾を誘い寄せる危険な炎という比喩からいえば、私は光が輝くために、わが身を犠牲にして燃える蠟燭でもあると同時に、炎に身を投ずる酔いしれた蛾でもある。私こそかつてあなたのために身を焼きつくし、あなたのためにこれからも精神と光になろうとしている。死して成れ (Stirb und werde!) の Metamorphoseこそ私の最内奥の希望である。神々に人は犠牲を捧げたが、犠牲は神にほかならなかった、と答える。この自己弁明そのものが、世界は自己を中心に回っているという強烈な自己愛の現れかもしれない。蛾としての自分、AEM がそれに気がつかなかったはずはない。

(6) Proteus (水神プロテウス)

詩的イロニーは、何者とも戯れうるが、何者にも変身しうるゆえに、捕えることがむずかしいプロテウスに似る。TM は女性の登場人物の姿を借りて自己の同性愛の想いを形象化した。Potiphar 夫人の Joseph に対する想いは、20歳前後の Paul Ehrenberg への想い、Houplé 夫人の Felix Krull に対する誘惑は、Züricher Dolder Hotel のボーイ Franz Westermeyer への想い、子宮がんの出血を月経のよみがえりと錯覚してアメリカの青年 Ken Keyton に恋する「欺かれた女」Rosalie von Tümmeler は、Düsseldorf 芸術大学長子息 Klaus Heuser への想いの比喩化といわれる。すなわち TM は Joseph であると同時に Potiphar 夫人でもある。「欺かれた女」とは AEM でもあり、TM 自身でもある。Thamar は神殿娼婦に身を装って Juda を誘惑してその種を宿し David につらなるイスラエルの正統の血筋となった。Lotte は Goethe とともに語り継がれるように、AEM もまた TM とともに語り継がれるだろう。

7. Klaus の Claudel 論をめぐる雷雨、亀裂と融和

(1) 小春日和

1942年8月28日 TM は、イギリスの刻下の銃後の市民生活レポートのためアメリカを離れる AEM に満腔の讃嘆を示しつつ書く。すでにドイツの諸都市はイギリス空軍の猛爆を受け、TM の故郷 Lübeck もすでに42年4月4日壊滅していた。日々ヨーロッパで起きているのに全世界がどうすることもできない恐るべき既成事実に対する、私のコントロールできない苦痛がときどき怒りとなってあなたへの手紙にも噴出する。あなたはきつい手紙を書いたことを詫びておられる。あなたの生まれもった大きい性格にはある種のきつさがあり、専制君主的なきらいがなくはないが、それで

あなたを非難する人はいないだろう。そんなことを嘆くのは小さく愚かなこと。「私は私で、すでにいくつか害を与えてしまった論争的な怒りっぽさを知っていますが、この短気な怒りっぽい論争癖は、私の受苦力、私が自発的に選ぶよりつねにより大きなものと裏づけられる課題を私が荷重に負担していることと関係があります。私たちの友情の空にときどき雲がかかるのは、こういう状況では何の不思議ありません。そういうことがまれにしか起こらぬよう、私たちは双方とも配慮できるようになるでしょう。あなたの友情と、あなたのすばらしい国の心からの厚遇にふさわしくあるようベストを尽くします。」

42年9月4日 AEM 英国出発の挨拶。「私たちの友情がいまほど高く落ち着いているときはない、ましてこの新しい生活がさらに多くの戦争の仕事を私に要求するとしても、私たちを裂くことはけっしてない、という意識をもって旅立ちます。あなたはつねに私のそばにいて私を支え私を慰めてくれるでしょう。そしてきっと私はあなたがつねにあなたの女友だちを誇りに思えるようによりよい仕事をするつもりです。私の運命の分かれ目に私は、この数年間いかにまったくあなたの存在のもとに過ごしてきたかをいっそう深く感じています。そしてもし私が必ずしも十分に美しく品位がなかったとしても、Tonio よ、でも私は私のすべてを与えることに努めてきたのだと、言うことができるわ。私にはときおり、さながらただあなたがこの異国でひとりの女性を見出す運命にめぐりあうために、私のこれまでの人生が神々によってひじょうに豊かに多様にドイツ＝アメリカ的な伝統のなかで形作られてきたように思えてなりません。—あなたの恭順な暴君 Agnes」(傍点筆者)

これはすばらしい愛の、友情の率直な告白である。最後のくだりなどは、相思相愛の男女間でも、めったに言えないセリフではなかるうか。二人の友情の空にかける雲はなく、小春日和と思える日々であったとみえるのは幻であったのだろうか。

(2) 雷雨

1942年11月17日 Washington の超満員の国会図書館講堂で TM は公式顧問として初めて講演する。題目は『ヨゼフとその兄弟たち』。AEM といっしょに英語の草稿の点検。国会図書館長 Archibald MacLeish、副大統領 Henry Wallace の挨拶。Wallace は1935年 Harvard 大学名誉教授受賞の同士だった。宿泊先の Crescent Place の Meyer 宅でレセプション。法務長官、判事、大使、有名ジャーナリストなど名士が一堂に会す。「遅く私の部屋で女主人のために「杯」と「識別」の場を朗読。最後にはひどく不安を覚える。へとへとになり、ひとりであるのが心配になる。」(TB, 42.11.20)「マダムがお別れに私の部屋に入ってくる。困った親愛。行こう、行こう。」(同42.11.22) Meyer 夫妻は、できる限りのさまざまな配慮をし、王侯的待遇をしたにもかかわらず、TM 夫妻はすぐにも礼状を出さなかった。11月30日 NY の日記「ランチは Walter 家で Werfel 夫妻と。ディナーは Meyer 夫妻と Plaza Hotel で、そのあと二人といっしょに Carnegie Hall で Toscanini 指揮の Wagner コンサートへ。奥方は不愉快な振舞い、ご亭主はしまいにはあたりかまわずブツブツ言う。いまの関係に似つかわしく、おもしろくない別れ。」

TM のアメリカ亡命生活の政治的経済的文化的基盤を作り、カリフォルニアの新居建設の土台になった国会図書館顧問ポストを斡旋し、その議会図書館講演でも米副大統領はじめ関係者の招待な

どに神経を配った Meyer 夫妻の心情をおもんばかれぬ人はいらぬだろう。友情の空にかかる雲は、やがて翌年 Klaus Mann の Paul Claudel 論をめぐる出来事によって暗雲となり、やがて激しい雷雨となった。

(3) Paul Claudel (ポール・クロデル)

1943年4月末 NY *Herald Tribune* 紙に載った Massachusetts 州 Smith College 講師の Miss Anne Hart の投書が、友情関係の空に響く雷鳴となる。Klaus Mann が Paul Claudel をファシスト・シンパと非難、TM がカリフォルニアでも果たせる国会図書館の仕事に年9,000ドルも支出している TM ファミリーの友人 Arcibald MacLeish は、かつてほめた Ezra Pound が Mussolini のイタリアで活躍している以上、それをも Fascist シンパというべきだろう、父 TM も『考察』と同じくデモクラシーに対する軽蔑をもっているのではないかと批判。この切り抜きを AEM は TM に送ったのである。(cf. Hpr, 1330ff.)

43年5月1日 AEM → TM。Klaus は Claudel を Fascist だと言っているという。あなたも Claudel も私には二人とも神聖で、二人の間に対立を見るのは私にはたえられない。かわいそうな Claudel, 「彼が元気でいるかどうかしばしば心配している。彼は敬虔そのもので、それが彼を守っているのですが、フランスがわれわれから隔離されたいま私は彼の安全と生命を心配しているのです。この問題には首を突っ込まないでください。沈黙が最善です。」

43年5月8日 TM → AEM。こんな「愚かな悪意の鬱陶しい文書」をあなたは、読むに値しないと考へて、送りつけるべきではなかつた。Klaus が Claudel の精神的性格を特徴づけるのに、フランス精神の他のもう一つの型として André Gide の姿勢と対比したのは、まったく正しい。私もそれ以外に書きようがない。ドイツ的なものすべてを心から憎みプロテスタント文化を軽蔑している Claudel は、あるとき Goethe をとんななロバだと呼ぶにいたつた。彼の政治的傾向はカトリック的ファシズムの方向を示している。もちろんカトリック教徒は必然にファシストたらざるをえないということはないけれども。彼の劇はドイツ占領下のパリで上演されている。私自身彼の詩作をどれほど賞賛しているかは、すでに1916年『考察』で『マリアのお告げ』(*L'annonce faite à Marie*, 初演1912) 引用部分が示している。(Violène が父たちの不在の時代にこの世の重い災厄を一身に背負つて瀕病で死にゆく姿に、TM はなぜドイツとドイツ人が世界の非難を浴びながら時代の苦悩を背負いこまざるをえないのか(なぜガレー船に?) という気持ちを重ねあわせていた。)

(4) 絶縁状と修復

しかしこの手紙は二人の友情の亀裂をさらに深くする。

1943年5月14日 AEM → TM。あなたの手紙で眠れない苦悶の夜を過ごした。私の長男 Bill がアフリカの前線で生き残っているのかどうか3週間も消息がわからない不安のきわまるまさにそのときに、私の最愛の友人で今日の世界では最も勇敢で最も純粋な精神の持ち主を非難なさる。Claudel は息子たちといっしょに自由の世界へ逃げようと思えば逃げられたのに、フランスに留まっているのだとしたら、カトリック的な苦悩の価値観や死に対してわれ関せずという冷淡さ、おそらく殉教

の愛をもっていたからであって、私は同意見ではないが尊敬の念はもっている。「その偉大な詩作のすべてと同じように Claudel のした過誤は、あたたかい激しい気性の所産です。そのことを彼はけっして後悔したり謝ったりしないでしょ。しかし私はあなたに申しあげたい。冷たい無慈悲なモラリティーの最も非の打ちどころのない記録よりも、心からの深い人間的な共感と理解により軽減される過誤のほうを、私ははっきりと選びます。敬具」(英文, Vaget, 476)

Harprecht (1337) はこれを宣戦布告 (eine Kampfansage) と呼び、その返事を TM は日記 (TB, 43.5.25) で絶縁状 (der Scheidebrief) と記す。

Doktor Faustus を書き始めたのは43年5月23日である。

43年5月26日 TM → AEM。私にとって貴重だった友情関係がついさるのを見るのはつらい。「それは私にとって貴重だった。外国人である私がこの貴重な友情のもつ意味が何であるかを心得ていたし、この友情に誠実に細心に尽くしてきた。ひとつの奉仕ないし勤務と違ってよいかもしれない。この世での他のどの関係にもまして、より多くの思考と神経力と、机上での仕事をあなたとの友情に捧げてきた。あなたにはできるかぎり私の内面生活にも外面生活にもかかわっていただくように配慮し、あなたがおいでになるたびに、まだ他のだれも知らぬ新作を長時間朗読したし、あなたの愛国的な社会活動に心からの賛嘆も惜しかなかった。何も正しくなく、十分なものは何もなかったのだろうか。私の手紙には何のかけらもなかったとおっしゃる。何のかけらかわかりませんが多分人間性なのでしょう。いつもあなたはあるがままの私とは違う私を望んでおられた。あなたはユーモアも、尊敬も、あるがままの私を受け入れようとする心遣いもおもちでなかった。あなたは私を教育し、支配し、改善し、救済しようとなさった。やがて70歳になろうとしている私の人生はそうするには型ができあがり固まりすぎている、それは役に立たない相手にした無益な試みであるということを、優しく善意を尽くして警告申しあげたのですが、むだだったようです。お手紙の怒りの爆発は、もっと深いところにある幻滅や不満が、ほとんどとるに足らない動機を口実に爆発したものと言わざるをえません。平衡と明朗さのある、穏やかでゆるぎない心のこもったものにしたと思っていたこの友情関係にとって、おそらくはじめから脅かしていた危機が実際やってきたようです。それゆえこの関係と私たちに休息を与えましょう。なぜならそれだけが私たちの心の平衡を取り戻すことができるからです。少なくとも私にはこの苦悩から我に帰り自分の課題をまた見つけることができるためにはその平安が必要です。今のところまだそう簡単にいくようには思えません。私たちがお互いにおかげをこうむっているものは、なかなか忘れることができません。私はお互いにと言いました。といいますのも、私があなたから受けたご好意、ご援助、生活を楽にして下さったものを、私が面目を失うことなく受け取らせてもらえたのは、それが一方的な慈善行為ではないということを、私に思えるようにあなたがして下さったからです。」

1943年5月26日。同じ日付、つまり行き違いの手紙、AEM → TM。

「最愛の友よ——そうです——この呼びかけこそまったくの真実です。

私たちはおたがいに傷つけあいました。私はそのことでひどく悩みました、なお、悩んでおり、おそらくいつまでも悩みつづけるでしょう。——私が受けた過酷さよりも、私自身の過酷さについて。

私の人生はきわめて辛く、神経はきわめて疲れ、心は心配でいっぱいになっているので、この結びつきがあなたにとってたとえ何の意味もないとしても、私の愛は変わることがないと言うことで、心を軽くしなければなりません。

われわれの国の社会的改善のために働こうという決心で、こんなに果てしない戦いに投げこまれようとは予感さえしませんでした。私があなただけの助けをいかに必要としていたかを、Tonioよ、あなたがわかってくださらなかったのは、なんとという苦痛でしょう！」

43年5月28日 AEM → TM。「あなたがあなたの読者である私を教育するためにおられるのではないのに、私があなたから多くの時間を要求してきたことは認めます。あなたはいま私の眼前に私の要求するところ多い振舞いをはっきり見せてくださった。私は骨身にしみて恥ずかしく思いますし、もっともだと自覚しています。」ただまだ途中だが3年間かけたあなたについての仕事で私の心が豊かになったことを感謝したいし、あなたの大きな心に対する小さな返礼としたい。「しかし、私が国会図書館のアレンジをく汚した(besudelt)とおっしゃるのは、よくありません。どんな事情であっても私たちの間で使われてはいけな言葉です。私たちの間には、現世のどんな誤解も手の届かない、完全に超個人的な親愛関係があり、いまいつも物質的な事柄から遠く離れていることは、私と同様あなたもご存じです。TMがこの国アメリカで尊敬もされずなおざりにされて暮らさざるをえなかった、と言われぬように振舞ってきたのは、個人の私というより良心をもつひとりのアメリカ女性なのです。ですからあのアレンジに国家的性格を与えたのです。それ以下のこと、つまりただ金銭だけのことであれば、あなたにとって十分ではないと私には思えたからです。しかもこの行為をあなはいま「腐敗、情実、むだ遣い」とみなしておられる。Tonioよ、あなたは人を悲しませようとする石のように冷酷ですね。私たちの独特な神秘的な親和関係の気高さと純粋性をこのように否認されることほど私の骨身にこたえるものはありません。しかしあなたが何を言い、何をなさろうとも、この超個人的な親和関係は不変です。この関係は、だれの侵害も受けず、真実の王国で、存在しつづけます。この関係は、私の側から言うと、善、純粋、永遠を求める私の努力の表現です。この王国で私たちの精神は、たとえあなたが私の声をもはやならん聞こうとなさらなくても、途切れず出会うでしょう。」

国会図書館顧問のポスト斡旋を汚したとか、腐敗、情実、浪費などと言ったのは、Smith Collegeをほどなく辞めたAnne Hartなる投書女であって、上の手紙はAEMの誤解に基づくものであったが、この女性パトロンの気高い心情が滲みでており、貴重である。

43年5月29日。翌日のAEM → TM。「私たちの間の争いは終わりにしなければなりません、Tonio。私はもうもちこたえることができません。昨夜はまた眠れませんでした。そしてきょう仕事などできません。何も見えず、死人のように横たわっています。私の頭を駆けめぐっているのは、あなたの言葉だけです。理性を失ったかと思えるときでした。はじめて私は、あなたが私にとって何であるかを完全に知らされました。あなたがどういう様子であるかを知らないことにもはや耐えることはできないでしょう。あなたの手紙にある私の姿——それは私を殺すものです。それ以上よいものであるとはけっして望んでいませんでしたが、あなたの描かれるものはきわめて厭わしいものです。もしあなたが一瞬でも私の別れの手紙を私があなただけを見限ったとお考えになったとしても、どうか

私を、幻滅し怒り狂って愛する相手に復讐しようとしている浅はかな女だなどと言わないでくださいませんか？ だってそんな女は私と何の関係もありません。——私はそんな女ではありません。——私にとって私たちの友情関係は、何かもつとはるかに静かで崇高なものに変容した一種の脱自(恍惚)状態 (eine Ekstase) でありました。」

想いを遂げられず使用人の分際で私を襲ったと Joseph を讒訴する Potiphar 夫人にはない高貴さが、AEM にある。

43年6月2日 TM 日記。「こらえ性のない夫人の新しい手紙。私が夫人に対して無情に過ぎることはたしかにいえるかもしれない。お茶のあと平穏と平和を願いながら返報。」

43年6月2日付, 同日の TM → AEM。「私たちの間の言い争いやいさかいは終わりにすべきだというのはまったくそのとおりです。私はそれを終える決心をしました, さもないと私たちは二人とも破滅してしまいます。多くのことは, 以前もそうでしたし, いまもそうですが, おそらくただ, 言語に対するある種の情熱に由来する私の書きかたに問題があるからでしょう, 私のほうはたんに精確を期すつもりだったのが, しばしばあなたの気を傷つけるものをもっているのかもしれない。[...] 私は, すべては元通りだというようにしたくはありません。それはよくも正しくもありません。われわれの関係は, あまりに摩擦の大きい, 緊張した, 電気を帯びた, 息詰まるほどエモーションナルなものでした。われわれ二人にこれほどの苦痛と衝撃を惹き起したこの危機が, そのような要素を含む雰囲気を一掃したものと, 私はみなしたく思います。あなたがお手紙 (5.29) でお書きになったような状態にあるあなたを想像することは, 私には痛ましく良心の呵責にさいなまれます。けっして二度と同じことがあってはなりません。こんな状態は終わりにしなければなりません。——そしてそれが私たちの友情関係の終わりでなければならぬとしたら, それは私にとってひじょうに, ひじょうにつらいことであつたでしょう。しかしわれわれがいま書きあつたような手紙は冗談に書けるものではありません。われわれのこの手紙は, ひとつの友情の終結ではないにしても, 友情のなかでのひとつの時期の終結を意味します。もう一度くり返しますが, 私としては, 今度のこの苦痛に満ちた危機が, よい, 治癒力のある, 友情を固めるという意味で, われわれの友情関係のなかでエポック・メーカーなものであつた, ということになるよう配慮努力したいと思います。」

この手紙を TM の仮面の演技で真情の吐露ではない, と言えるひとがいるだろうか。

8. Joseph と Thamar, Frau von Tolna

(1) Frau von Tolna (フォン・トルナ夫人, ung. Tolna トルノ)

Adorno は TM 死後発刊された書簡集 Jonas Lesser 宛ての手紙 (Br. III, 225f.) を読んで「墓の下から中傷を受けた以上 TM についてもう書かない」と言ったと Tiedemann は書いている。Doktor Faustus は, 本人の許諾を得ていたとはいえ相当部分アドルノの新音楽理論に依拠したものであつたゆえにいろいろな誤解や風評が立つことになったので, TM は『ファウスト博士の成立』(1949) を書いて Adorno への信用を与えた。しかし Erika や Katja その他の反発を買った経緯が日記に記されている。Adorno が死後 (1969) 発刊された TM 日記 (解禁1975年) を読めば誤解だったと悟った

はずだと H. Kurzke (507) は述べている。では AEM (1970年逝去) はもし自分にかかわる TM 日記を読んだらどういう反応を示したであろうか。Kurzke (428) も Harpprecht (1341) も、AEM は TM を愛していたが、TM は愛していなかった、と明言する。では AEM は「欺かれた女」だったのだろうか。役に立つパトロンに対し TM は意識的に計算された演技を演じたにすぎなかったのだろうか？ TM の手紙と日記の落差は、その証明であろうか？ 証拠能力として手紙や作品より日記のほうが重いであろうか？ 1918年の日記を除いて1933年以前の日記をみずから焼却したのであってみれば、死後20年後解禁という遺言はあったにせよ、残された日記は家族はじめ不特定多数の人に見られるという意識は当然あったであろう。日記記述が全面的に真実を示すとは限らない。ゲーテが名づけたように人生は「詩と真実」なのだ。

筆者は、日記という楽屋も作品という舞台も両方とも人生の裏表であって、どちらが現実でどちらが夢であるかを裁断することはできない、いな両方とも人生や人間関係そのものである、と言いたい。虚実のあざなえる綾衣が芸術作品である。Thamar と Frau von Tolna 像に AEM の姿は永遠化されている。

作品中の Tolna 夫人は、Thaikovsky のひそかなパトロン Nadezhda von Meck や、TM 夫妻が実際滞在した Budapest 近郊 Hatvan の城館の Irene von Hatvany や、AEM の合成モンタージュであるといわれる。(Tolna, 147f.) Adrian との関係の基本原理は、直接会うことを禁欲的に断念し、純粋に精神的な関係に厳しく踏みとどまることである。ただ文通だけのこの守護女神は、しかし「Adrian の作品のきわめて賢明で精確な理解者かつ崇拜者であり、彼の身を気遣う女友だち、相談相手、彼の存在に無条件に仕える奉仕者」であり、Adrian は「孤独に可能な打ち解けと信頼の限界まで行って」これに応える。(VI, 518) 「私は他のどの人への関係よりもより多くの思考、神経力、机上での仕事を、あなたとの友情関係に捧げてきました。」(1943. 5. 26)

これは TM からすれば、他人に対する最高の賛辞、心からの信頼と感謝の表白である。事実 TM は死ぬまで創作活動の内面プロセスを間断なく AEM 宛てに書き続けた。とくに *Doktor Faustus* 成立に最も親密な関与をしたのは Adorno と AEM であったといわれる。(Tolna, 145) <冷たさ> がその主導音階の一つというのが証左である。精神の薄明のなか Weimar で母親の腕に抱かれていた Nietzsche のように、Adrian の告別に墓穴のまわりに居残った数少ない女性たちのなかにヴェールを深くかぶってそっと立ち去る Frau von Tolna を描いたのは、虫がいいかもしれないが、AEM がそういうパトロンであってほしいという TM のひそかな願望だったのかもしれない。

現代の Faustus 博士は「我に触れるなかれ」と言うガラス蝶で有毒の砂漠の天使 Hetaera Esmeralda に接して梅毒菌をもらうが、この愛と毒の一体化した Eros は創作のインスピレーションを生む。愛することは許されぬという酷寒の冷気、Echo のように愛する者は死ぬ運命にあるという悪魔との契約である。美と毒の融合エロスが創造力の源泉になることを象徴するのが Adrian のはめていた Frau von Tolna の贈り物、緑色のエメラルド指輪に彫りこめられた褐色の寓意紋章〈翼ある蛇〉である。それは太陽神 Apollo の矢と日光、矢傷、シュツとなる有翼の蛇を表す。言葉こそ Apollo の矢であることを TM はくりかえし言う。(cf. X, 253) Esmeralda はスペイン語でエメラルド (翠玉 Smargd) を意味する。H. Vaget は Victor Oswald の論考をふまえ、永遠に女性的なるもの、Frau

von Tolna と Esmeralda のひそかな同一性を指摘している (Tolna, 150)⁶。12音階技法と表現の復活、知的冷厳と牛舎のぬくもり、「Faustus 博士の嘆き」と「歎びに寄せる」、地獄の哄笑と天使の合唱など、非同一的なものの対立と合致は、現代の Faust 博士物語構造の骨格であって、実は「一つの胸に住む二つの魂」、Faust と Mephisto, Serenus と Adrian, Frau von Tolna と Esmeralda のひそかな同一性を暗示する。同性愛を含めたエロスこそ創作力の源泉とするのが TM の創作原理の核心であることは、たとえば Michelangelo の「君の吐息のなかでわが言葉は形造られたり」という少年愛と創作力の一体論 (IX, 792f.) にもみられる。TM は声を犠牲にした人魚の嘆きに、こだま (Echo) を返しえたのであろうか？

手紙と日記、舞台と楽屋、仮面と素顔の急激な落差にもかかわらず、AEM が TM のアメリカ亡命中の生活と創作の守護女神だったことは否定できない。

(2) AEM の TM への姿勢は 2 面ある

一つは、TM の作品、文体、理念への敬愛。Tolstoi や Dostojewski と並んで TM を高貴な精神の顕現、暗黒の混乱世界にあって、光明や純粋さ、人間性の理想を求める魂、すなわち神の模索者の一人とみなした。それは自分の心の探求でもあった。

もう一つは、理念、理想だけでなく、AEM の心の奥底に潜む生の充実を求める欲求、生の充溢のためには冒険を怖れず未知の域に参入しようとする熱情である。

TM の AEM 評にあるように、Zeus の妻 Juno と、父 Wotan の命に背き Sieglinde を助けその子 Siegfried を愛する Walkühre の 2 面である。

1970年上梓された自叙伝の最終章『運命の車の回転』で AEM は書く。

「Tommy, この超自然的な私たちの出会いは何だったのでしょうか？ 絶対的な純粋さを求めることにとりつかれた二人の神の探究者は、しばらくの間、道をいっしょに歩きました。私たちはおたがいに助けあって生き、目に見えない臨界や私たちの個性を無視しないようにつねに注意しました。Jacob が Tamar を愛したように、Tamar は Jacob を愛したのでしょうか？ Jacob は二人のうち年長でありより賢かった以上、おそらく、そうではありません。しかし Tamar は自分の残りの人生にとって悩みであり永続する問題となるに十分なほどそれ以上に Jakob を愛したのです。」 Vaget (71) は最後の行を、AEM にとりこの友情関係は生涯整理できなかった問題意識の表白である、と言っている。

Walküre と Juno, Astarte と Maria, 灼熱の情熱と神を求める聖性とを内包した AEM のみならず、TM の人と作品にもまた、精神と自然、父と母、Apollo と Dionysos などの二元的原理がその根源を成し、両者間を浮遊するイロニーを生んでいることは他書⁷で触れた。AEM も鋭くこの根源を見抜いている。

「C Claudel の二つの横顔には鋭い二元性 (Dualism) があった。片方の眼は定かならぬ永遠なるものに焦点を合わせ、他方の眼からは官能的現実の誘惑が洩れていた。彼の言葉は冷笑的で、さながら善と悪とが彼の人格のなかでたえまない闘争をしているかのようなようだった。Claudel における天と地のこの葛藤は、TM にもあり、それが彼らの創造的天才、イロニー、辛辣なユーモア感覚の源泉で

あった。」(Roots, 179)

Thamar エピソードを書き終えた日 (42.1.16), TM の手紙の言葉「自分を偉大だと思ったことはないが、偉大さと戯れ、偉大さとある種の親しい関係を保ちながら生きるのは好きです」(42.1.11) という文面は、あなたの芸術よりはむしろ私の人生にあてはまるのではないかと AEM は書く。「相互の救いのために樹立された Jakob と神の契約と同じものが、純粋な人間の出会いのなかでも可能なのではないのでしょうか、すなわち一方が他方よりはるかに優れているという人間関係のなかでも？」(42.4.7) Jacob が Tamar を愛したように、Tamar は Jacob を愛さなかった、とはこの脈絡で捉えるべきだろう。

「Tommy と私、絶望的なほどお互いの心ともつれあうようになって、緊張で張りつめた二つの北方的メンタリティが、ときには思春期のカップルのように振舞えたのは、信じがたいが真実なのだ。この熱烈な情熱が二人の人間の間に存在したが、二人は男女間に存在する正常な性的緊張の息づかいをみな抽象的な人間関係へと変質させた。それは私が人間というより、ひとつの理念に惚れこんだほど高貴なものであった。」(Wheel, 807)

(3) 結び

TM と AEM の友情関係は、崇拜と服従、理性と感情、精神と肉体、自制と誘惑、冷と暖、受と与、引力と斥力、亀裂と修復など、起伏の激しい山や谷を通過して行くが、しかし間断なく TM の死 (1955年8月26日, 享年80歳) まで続いた。自己の死をまだ予感せず Friedrich Schiller 没後150年祭の講演原稿を準備していた TM は、1955年2月9日 AEM 宛てに、手書きで11頁にわたる長文の遺言の手紙を書いた。2月11日の金婚式、6月6日80歳の誕生日のほか、シラーの自由な光の精神性を結びの言葉としている。Herakles と Hebe の婚姻を描くという Olympos の牧歌を夢想していたシラーのプランには「超越的なもの、生を超え出るもの、聖なる精神にのみ保留されたもの、もはや現世のものでないものがある。彼の憧れは根本的には光明化、影もなく、制約もなく、くただ光、ただ自由」でした。老 Goethe は嫁 Otilie が Schiller をけなすようなことを言ったとき「お前たちはみなシラーに比べれば貧しすぎ、現世的すぎるのだ」と答えました。」(1955.2.9)

これは TM と AM の関係にもあてはまるのではないだろうか。

これに対し病気だった AEM は「あなたの手紙を読んで感謝の涙が眼にあふれている...いろいろな考えや愛の流れが私に押し寄せている...あなたが私の人生や努力を非常に高め美しくして下さったことに私はどれほど感謝していることか。」(55.2.14) と返報する。

83歳 Claudel 死去のお悔やみ状が AEM への TM の最後の手紙となった。「すべて生あるものは死す、有限を通過して永遠へと、と彼は言った。この永遠を彼は信じていた。だから Je n'ai pas peur (私に怖れはない) と言えたのだ。長い功績多い人生のあとに休息あれ！ おそらく彼は苦しまなかっただろう。もう1度治るように思える心臓発作であれば最悪であっただろう。死の苦しみは少し距離をもって死自体に先行するのがふつうです。すると死の静止は苦しみが無い。Goethe の場合もそうでした。あなたからの手紙が Claudel のもらった最後の手紙でした。あなたはもう彼から愛情あふれる手紙はもらえません。しかし存在したものは残ります。そしてこの友情への思い出があな

たのこれからの人生全体を輝き照らすでしょう。」(1955.3.16)

TMとAEMの親密な友情関係にもあてはまる、AEMへのTM最後の手紙であった。
AEMはTM死後15年生きのび、1970年83歳 Mount Kisco (NY) でその生涯を閉じた。

(すぎき・けいぞう つくば国際大学非常勤講師)

Text:

Hans Rudolf Veget (Hg.) 1992: *Thomas Mann-Agnes E. Meyer Briefwechsel 1937-1955* (=Veget)
S. Fischer, Frankfurt am Main (=FrM)

Agnes Elizabeth Meyer:

1953 *Out of these Roots. The Autobiography of an American Woman* (=Roots),
Boston Arno Press, A New York Times Company, New York 1980年版による
1970 *A Turn in the Wheel of Fortune* (=Wheel) In: *Life as Chance and Destiny* (Veget, 803-811)

Katharine Graham 1997: *Personal History* (=PH),

Alfred Knopf NY / 『わが人生』 小野善邦訳 TBS ブリタニカ

Thomas Mann:

1974 *Gesammelte Werke in 13 Bänden* (巻数のみローマ数字), S. Fischer FrM
Tagebücher (=TB): 1981 (TB 1937-1939), 1982 (TB 1940-1943)

参考文献:

Hermann Kurzke 1999: *Thomas Mann. Das Leben als Kunst* (=Kurzke). C. H. Beck, München

Klaus Harpprecht 1995: *Thomas Mann. Eine Biographie* (=Hpr). Rowohlt, Reinbek

Donald Prater 1995: *Thomas Mann. Deutscher und Weltbürger*. Carl Hanser München

Marianne Krüll 1991: *Im Netz der Zauberer-Eine andere Geschichte der Familie Mann* (=Krüll). Arche

Doris Runge 1998: *Welch ein Weib! Mädchen- und Frauengestalten bei Thomas Mann*. Deutsche Verlags-
Anstalt, Stuttgart

Thomas-Mann-Jahrbuch (=TMJ). 1991, Bd. 4. Klostermann FrM

Reinhard Baumgart 1991: *Joseph in Weimar - Lotte in Ägypten* In: TMJ Bd. 4, S. 75-88

Eckhard Heftrich 1991: *Potiphars Weib im Lichte von Wagner und Freud*. In: TMJ Bd. 4, S. 59-74

H. R. Veget 1987: *Frau von Tolna* (=Tolna) In: *Zeitgenossenschaft. Festschrift für Egon Schwarz zum 65.*
Geburtstag Hg. P. M. Lützeler, Athenäum FrM, S. 141-152

Fl. Fr. von Biedermann 1969/72: *Goethes Gespräche in vier Bänden* (=GG). Hg. Wolfgang Herwig, Zürich
Artemis

Martin Walser 1997: *Werke in zwölf Bänden* (=MW). Suhrkamp FrM.

注

- 1 原文では1936年を Vaget は37年に訂正。出来事の回顧順序が AEM と Katharine の回顧録で異なる感がある。娘に従う。
- 2 TM: *Briefe an Otto Grautoff 1894~1901 und Ida Boy-ed 1903-28*. Fischer FrM 1975, S. 79ff.
- 3 Martin Walser 1982: *Goethes Anziehungskraft* In: MW. Bd. 12 *Liebeserklärungen*. S. 620, 621
- 4 Martin Walser 1981: *Selbstbewußtsein und Ironie* In: Bd. 12, 502f./マルティーン・ヴァルザー, 洲崎恵三訳 1997『自己意識とイロニー』法政大学出版局. 67頁
- 5 Rolf Tiedemann 1992: *Mitdichtende Einfühlung -Adornos Beiträge zum Doktor Faustus -noch einmal* In: *Frankfurter Adornos Blätter* I, München, S. 28f.
- 6 Victor Oswald 1948: *Thomas Mann's <Doktor Faustus>. The Enigma of Frau von Tolna*. In: *Germanic Review* XXIII, S. 249-253
- 7 洲崎 恵三 2002:『トーマス・マン—神話とイロニー—』, 溪水社

Thomas Mann und Agnes Elizabeth Meyer (2)

Keizo Suzaki

Resümee (Deutsch) : Warum und wie war Agnes Elizabeth Meyer (=AEM, Frau von Eugene Meyer, dem Besitzer der *Washington Post* und ehemaligen Präsidenten der FRB) an Thomas Mann interessiert? Wie entwickelte sich ihre Beziehung inklusive der Mann- und Weibbeziehung? Aufgrund ihrer Briefwechsel, TMs Tagebücher und AEMs Autobiographien folgen wir einer Spur ihrer zugleich intimen und kalten Verhältnissen. TMs (und Goethes) Kälte spürte AEM, die schrieb ihm, ihre Liebe sei ein Solo-Tanz. Aus einem Auge blickt das Faustische, aus dem andern das Mephistophelische der eisigsten Negation. Eine alles umfassende Größe und ein Nihilismus der Ironie. Diese Dualität von Apollo und Dionysos ist die Urquelle seiner Produktivität. TM gestaltete AEM-Bild als Thamar und Frau von Tolna in *Joseph* und *Doktor Faustus*. Trotz des großen Gefälles zwischen TMs Briefen und Tagebüchern hörte TM nicht auf, an AEM den Prozeß seines Lebens und Werkes zu schreiben. AEM ist zu seinem Tode eine Schützgöttin von TMs Leben und Schaffen geblieben.

Schlüsselwörter: Joseph und Potiphars Weib, Kälte, der ironische Nihilismus, Thamar und Frau von Tolna

英文アブストラクト : Why and how was Agnes Elisabeth Meyer (=AEM, Mrs. Eugene Meyer, the publisher of the *Washington Post* and ex-president of the FRB) interested in Thomas Mann? How was their friendship, including man and woman relations, formed? On the basis of their letter exchanges, TM's diary and AEM's autobiographies we trace both their intimate and cold relationship. TM (and Goethe) felt cold to AEM, who wrote him that her love was a solo-dance. From an eye Faust looks, from the other Mephistopheles, the coldest negation. The eyes of their arts consist of God and the ironical nihilism. However this dualism of Apollo and Dionysos was the womb of their creativity. TM described AEM as Tamar and Madame von Tolna in *Joseph* and *Doktor Faustus*. Despite the great differences between TMs diary and letters TM continued to write to AEM about the process of his life and works. AEM was a tutelary goddess of TMs life and creativity until his death.

Keywords: Joseph and Potiphars Wife, coldness, the ironical Nihilism, Tamar and Madame von Tolna

